

介護 医療 年金 ライフプラン

ゆうゆうLife



日雇い労働者の街、東京・山谷地区にある在宅型ホスピス「きぼうのいえ」。行き場を失った人々がたどり着く終の住み家です。施設長の山本雅基さん(40)とスタッフは、入居者に家族のように寄り添い、三年半の間に三十七人をみとてきました。死が身近にありながら、この「いえ」には笑顔があります。(寺田理恵)

山谷の在宅型ホスピス

施設長・山本雅基さん

「きぼうのいえ」はホームレスだった人や、行き場のない人が最期の時を過ごす場所です。「死にたくない」といった人が、ここには一人もいません。自分の意にならない人生を、運命や宿命という形で受け止めてきた人たちだから。

「ここは素人同然の僕が、看護師の妻と始めました。施設ホスピスでは通常、愛護、失調症などの人も断らないから、難しいケースの人が来ます。いろんなハンディキャップをもっている人をみていく、介護する。それが大変な仕事だという認識はありましたが、最初は意味不明の言動に振り回

やまもと・まさき 上智大学神学部を卒業し、NPO法人で事務局長を務める。平成14年、看護師の妻と緊急一時保護施設「なかよしハウス」(11床)と在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」(21床)を開設し、施設長に就任。今年3月、『東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。』(実業之日本社)を出版。



ホスピス 治療の見込みがないと判断された終末期の患者の痛みや症状を和らげ、患者と家族の不安な心を支えるための医療施設。主にがんとHIVの患者が対象で、入院時に患者が病名や病状を理解していることが望ましいとされる。患者の自宅に医師や看護師などが訪問してケアを行う在宅ホスピスもある。

上
借金を抱えた入居者がいたときは、専門家に相談しながら対処したこともありました。

「され、どうしていいかわかりませんでした。病院に行った人がこの食事がまずいと訴えたり、虚言癖のある女性が僕に乱暴されたと言いをうたりはかしくて聞いていたらね

愛や喜び知り

死生観もてば怖くはない

「えや」とせせら笑った入居者を、施設長の僕が殴ってしまった。誠心誠意やってるのに、こういうふうにはか返せないのか。せつなくて、「きぼうのいえ」をやめたくまりました。不信感の塊のような人や、周囲の人を追い詰める性格の人から、マイナスの情感を受け取ったとき、同じように返す「えや」の消耗します。人格対人格として向き合い、どういふ思いで生きているかを理解し、共感しても、同化はしない。むしろ、その人の個性として受けとる。「次はどんな難問が出てくるだろう」と興味を持つようにします。ユーモアで返し、笑いをも

「僕たちの根っこには、三年半かけて持った死生観があります。『きぼうのいえ』は入居するときに余命を告知されていなくてもよく、入居期限もありません。開設当時から入居者もいますが、それでも平均滞在期間は百六十日です。僕はかつて死が怖かったです。最期をみとるとき、視

死は終わりでありません。ここに来て、人とのかわりから愛を学んで、死の世界では神や仏との関係性から学びが続いていく。死の世界への誕生日ととらえて送り出します。そういうふうな死を覚えていかならない。僕は自身はカトリックで、ここはキリスト教関係の支援を受けていますが、宗教はキリスト教でも仏教でも、どちらでもいい。体は滅んでも魂は学び続ける。僕たちは離陸を見届ける管制官のようなものと思っています。

「きぼうのいえ」は病院に行ってきたよ。入居者から「日の出来事を聞く山本雅基さん